**題名：　統一の共通分母**

**お名前：　茂木福美**

私は、長年韓国語の通訳をして来たのだが、ある経験を通して「統一の共通分母」とはこういうものなのかもという体験をしたことあった。それは、韓国で行われたある国際会議の場で日本語へ通訳をする担当をした時の事のである。その場には同じ通訳をする英語、モンゴル語、スペイン語、フランス語、中国語圏の担当者が、それぞれの担当ブースに入ってハングルで語る発表者の言葉を、自国の言葉に一生懸命通訳をしていた。かの体験は、休憩の時間になり皆が一同に会してお茶をする時に起こった。その場は、生まれも育ちも年齢も肌の色さえ違う人たちが集まって茶菓子を食べながら話していたのだが、話す言葉が自然にハングルになっていたのだ。当然であるかのように共通言語がハングルだったのだ。同じ言葉を使い笑いながら語りあう姿に、一つになるってこんな感じなのでは？と思った瞬間だった。そして、もし天国があるならこんな国境も世代も越えて心が通じあう一つに共通分母（ここではハングル）が必要ではないかと実感をしたのだ。

私の好きな言葉に、やなせたかしさんの「心と心が触れ合って、何にも言わずにわかること、ただそれだけの喜びが人生至上の幸福さ」というのがある。高校生時代に覚えた言葉だが、常にその小さな喜びを大切に、心と心、心情が通じあうことが幸福であり、平和の世界を作って行く第一歩なのではないかと思っている。私は幼い頃からちょっと変わっていて小学生の頃にはこんな事を思っていた。丁度東京オリンピックが終わった後で、日本にも世界中の人が集まって来ていた。世の中には5色人種がいると言われているけど、その人たちが一つになるとどうなるかと、例えば白人と黒人、黒人と黄色人、黄色人と白人・・・等々とドンドン結婚して子孫が増えていったら、結局人類は最終的に何色の人間になるのだろうか？どんな世界になるのだろうか？と、ちょっとませていたかも知れないが、そんなことを漠然と思い、その頃から多文化の国際結婚を夢見たりしていた。但し、その頃の私の国際結婚の夢はヨーロッパのお城のような家に住む王子様と結婚をするという、幼い子が夢見るおとぎ話のようなものだった。そんな一つになる世界の結論は未だ分からないが、一つだけ言えることは、私も韓国人と結婚をして国際家庭になったという事実だ。（夢と現実はちょっと違うが）もう４０年も前の事である。それから、当時から多少韓国語が出来ていた私は、主人との会話はハングルで行う事が出来ていた。しかし、最近、ふと思う事は、ただ単純に言葉が出来る事だけが、一つになる共通分母では無いと言うことである。勿論、共通分母としてハングル通訳の経験をした時のように、一つに成るための必要条件であることは事実である。しかし、たとえ技術的に共通の言語を話せたとしても、心が通じ合わなければ共通分母にならないのでは無いか思うのである。先ずはその言葉を語る人の心を理解しようと努力する姿勢が大切であるし、相手の立場に自分を立ててみること、相手の心を一度自覚して見る事がより重要であると今更ながら悟った。「心と心がふれあって何にも言わずに分かること・・」国際結婚を通して国境と文化を越えたなら、言葉さえもいらない心と心の繋がりを持つことが出来るようになりたい。そのためには相手を思いやる心、そんな愛の心情の文化世界が共通分母になれば、平和で統一された幸福の世界が出来るのではないかと思う。平和統一聯合も創設20周年を迎え、このようなエッセイを書く機会を与えられた。ここには思想信条を超えて様々な方が所属しているが、活動目的が「為に生きる」神主義の真の愛を根本精神とするとあるように、やはり、「統一の共通分母」は真の愛であると私は思う。